

「底が突き抜けた」時代の歩き方 425

「パレスチナ」問題に対するサイドの提言

《いったいどのような冷酷な計算に基づいて、イスラエル軍は、何十台もの戦車、何十回ものF16戦闘機出撃、一日数百回にのぼるアパッチ攻撃ヘリからのミサイル攻撃などによって、わずか一平方キロの狭い土地に1万5千人もの難民がバラックに収容されているジェニン難民キャンプを一週間以上も包囲攻撃したというのだろうか？ 自動小銃をもつ男が数十人いるだけで、ミサイルも戦車もなければ指揮官もいない無防備な難民キャンプにこのような攻撃を仕掛けておいて、それをテロリストの暴力とイスラエルの存続を脅やかすものへの対抗措置と呼ぶことが、どのようにして可能になるのだろうか？

戦闘が終わった後、イスラエルのブルドーザーがキャンプの残骸の上にせっせと積み上げはじめた瓦礫の山には、何百人もが埋まっていると伝えられている。

パレスチナの民間人は、男も女も子供も、ネズミかゴキブリのように何千という単位で殺され、攻撃されても、同情や弁護の言葉もたいして聞かれぬような存在だというのだろうか？ イスラエル兵に連れ去られたまま消息を絶った何千ものパレスチナ人男性の捕囚や、イスラエルのブルドーザーが西岸地区のいたるところにつくり出した瓦礫のなかで、家を失い欠乏のなかで生き延びようともがいている数知れぬ一般の人々についてはどうなのだろう。包囲攻撃はすでに何カ月も続いており、パレスチナ人の町では電気や水道が遮断され、完全な外出禁止令が何日も長期にわたって続き、食料も医療も欠乏し、けが人は出血多量で死に、救急車や救援隊員への組織的な攻撃には温厚なコフィ・アナン（国連事務総長）さえ非道な行為として公然と非難しているではないか。このような行為は、そんなに容易には記憶を書き換えたり、抹殺することはできないだろう。盟友たちはイスラエルに対し、その自滅的な政策がいかにしてこの国に和平と、承認と、安全をもたらすというのかを問いたださねばならない。

世界最強の恐るべきプロパガンダ装置によって、一つの民族全体を「戦士」や「テロリスト」と大差ないものにしてしまうとてつもない変形がなされた結果、イスラエルは軍隊のみならず作家や擁護者の大部隊をくり出して不正と苦しみと虐待の恐ろしい歴史を掻き消し、それによって処罰されることもなくパレスチナ人の市民的存在を抹殺してのけるということが可能になったのだ。一般大衆の記憶から消え去ってしまったのは、1948年にパレスチナの社会が破壊され、難民となった民族が発生したこと、1967年の西岸地区とガザ地区のイスラエルによる征服とそれ以来続いている軍事占領、1982年のレバノン侵略により17500人のレバノン人とパレスチナ人が殺され、サブラとシャティーラの両難民キャンプで大量虐殺が起こったこと、パレスチナ人の学校、

難民キャンプ、病院、その他あらゆる種類の民間施設や設備に対し絶え間ない襲撃が加えられてきたという事実だ。いったいどのような反テロ目的のために、文部省、ラマッラー市当局、中央統計局の建物、市民権関連や保健衛生関連や文化関連や経済開発関連の各種専門機関、病院やラジオ局やテレビ局などを破壊し、記録を持ち去ったというのか？

シャロンの意図が、単にパレスチナ人の「士気をくじく」だけではなく、国民的諸機構をもった一つの民族としての彼らを抹殺することにあるのは明確ではないだろうか？

このような力の不均衡と格差があるということを踏まえれば、軍隊も戦闘機も戦車ももたず、きちんと機能する指導部もないパレスチナ人に対して暴力を「放棄」するよう要求しつづけ、それでいてイスラエルの行動にはそれに匹敵する制限をまったく要求しようとしなないというのは、とても正気の沙汰とは思えない。自爆攻撃（わたしはつねに反対してきた）の問題でさえも、イスラエル人の命はパレスチナ人の命より価値があるという隠れた人種偏見に基づく基準を許すような視点からは分析ができない。長期にわたるイスラエルの軍事占領によって、またシャロンが1950年代の台頭以来ずっと組織的な残虐行為を公然と加えてきたことによって、はるかに多くのパレスチナ人が命を失い、体を不自由にされ、人生を歪められ、縮められてきたのだ。》

白血病に冒され、余命幾許もない（この一年半後の03年9月25日、死去）中で、エドワード・サイードは『イスラエルは何をしたのか』（02年4月、『戦争とプロパガンダ2』所収）で、こう切羽詰まる調子で書き綴っている。彼の諦観を排した熱ある飽くなき語り口は一貫しているが、一般読者である我々には詳らかにしない事情について、『戦争とプロパガンダ』の『訳者あとがき』でこう記されている。

《オスロ合意が成立した1992年の終わりごろから、サイードはアラブ圏の読者に直接語りかけるという取り組みを開始し、アラビア語の日刊紙『アル・ハヤート』（ロンドンで編集されるがアラブ圏で広く読まれている）に隔週ペースで記事を書きはじめた。同じ記事の英語版はエジプトの英字新聞『アル・アフラーム・ウィークリー』にも同時に発表されており、現在ではインターネットを通じて容易に読むことができる（<http://www.ahram.org.eg/weekly/>）。》

『戦争とプロパガンダ』に収録されている7編の文章は、この『アル・アフラーム・ウィークリー』に掲載されている記事の中から切り取って来たものである。しかし、それらの文章はイギリスの『オブザーヴァー』紙（『ガーディアン』紙の日曜版）や『ネイション』誌に掲載されていることもあって、《そういう意味では必ずしもアラブの読者のみを想定しているわけでもなく、誰に対して語りかけているのか、単純に割り切れないところがサイードの本質を反映しているとも言えよう。》

非常に印象的なことは、サイードが文中で繰り返している「わたしたち」について、《それは誰をさしているのか？》と訳者が続けて問いかけ、詳しく説明していることである。たとえば『ふるい起たせるヴィジョン』の中では、「わたしたち」は次のように頻出している。

《不正な政策に対するわたしたちの防衛手段は倫理的なものである。わたしたちはまず最初に自分たちの倫理的な優位性を確立しなければならない。そのうえで、そのような立場に対する理解をイスラエルや合衆国において広めなければならない。わたしたちがこれまで一度も試みたことのないアプローチである。わたしたちはこれまで相互の交流や議論を拒みつづけ、そういうことについては侮辱をこめて「正常化」とか[敵方への]「協力」としか呼んでこなかった。妥協を排してわたしたちの正しい立場を示すこと(わたしが要求しているのはそれだ)が、譲歩して解釈されることなど絶対にありえない。とりわけ、その「譲歩」が占領者に対して、あるいは占領と報復措置という不正な政策をあみだした者に対して、直接かつ強力におこなわれるのであれば、なおさらありえない。なぜ、わたしたちは、わたしたちを抑圧するものたちとじかに向き合い、人間味のある態度で、説得力のある対話を交わすことを恐れるのだろうか。なぜ、わたしたちは贖罪の暴力などという漠然としたイデオロギー的な約束を信じつづけるのだろうか。そんなものは、ピンラディンやイスラーム主義者たちが吐き散らす害毒とほとんど変わるところがないではないか。わたしたちの要求に対する答えが見つかるのは、筋の通った抵抗、軍事占領と違法入植に対する高度に組織化された市民の抵抗、教育プログラムの整備による共生の奨励や公民教育や人命尊重思想の普及などの中である。

とはいえわたしたちは現在、耐えがたい袋小路にはいりこんでおり、ほとんど反故にされたも同然となっている1991年のマドリード宣言における和平の枠組(以下略)》(傍点は引用者)

この「わたしたち」は、《イスラエルに圧力をかけて、エルサレムを含めた占領地からの撤退をうながし、また(...)入植地を撤去させることを除いては、和平への道はありえない。これを実施するには明らかに段階的な措置が必要であるが、その一方でまた、当面の措置として無防備なパレスチナ人を保護する緊急の対策が必要である》ことを確認した上で、「わたし」による次の提案を見据える。《すなわち、ネルソン・マンデラのような人物、あるいは申し分のない資格をそなえた和平調停者のパネルの主催で、相互の承認と信頼を示す重要な象徴的ジェスチャーが交換され、それによって正義と思いやりが和平進展に欠かすことのできない要素として確立されるよう努力すべきである。残念ながら、アラファトもシャロンも、そのような高等な企てには相応しくないということは否定できない。パレスチナの政界には徹底的な見直しが必要である。パレスチナ人の誰もが切望しているもの - 尊厳と正義にもとづく平和、そしてそのもっとも重要な要素として、イスラエルのユダヤ人との穏当で平等な共存 - を余すところなく代表するものに再編せねばならない。わたしたちは、苦しみつづけてきた国民の犠牲に長いあいだ少しも近づこうとしなかった指導者の見苦しいごまかし、みっともない立場のぐらつきを振り切らなくてはならないのだ。イスラエルの人々についても事情は同様だ。シャロン將軍のような人物によって最悪の方向に導かれているのだから。わたしたちに必要なのは、虐げられてきた精神を高揚させ、現在のあさましい状況の先を見させてくれ

るようなヴィジョンである。ほんとうに希求すべきものとして確固たる態度で人々に示されれば、そのようなヴィジョンはけっして破綻することはない。》(傍点は引用者)

以上の文中の「わたしたち」は、《まず最初に自分たちの倫理的な優位性を確立しなければならない》ところに現れようとする。つまり、《これまで一度も試みたことのないアプローチ》の中に「わたしたち」が出現しなければ、「わたしたち」は現実に登場することができない。《わたしたちを抑圧するものたちとじかに向き合い、人間味のある態度で、説得力のある対話を交わすことを恐れる》ことのどこに、「わたしたち」は現れることができるだろうか。《筋の通った抵抗、軍事占領と違法入植に対する高度に組織化された市民の抵抗、教育プログラムの整備による共生の奨励や公民教育や人命尊重思想の普及などの中》に「わたしたち」が出現できないとなれば、「わたしたち」は現実のどこに余地を占めることができるというのだろう。

《尊厳と正義にもとづく平和、そしてそのもっとも重要な要素として、イスラエルのユダヤ人との穏当で平等な共存》を《パレスチナ人の誰もが切望している》として、「わたしたち」は明らかにパレスチナ人の中に存在しているけれども、「わたしたち」は彼らの中に存在しているだけではない。パレスチナ人が《イスラエルのユダヤ人との穏当で平等な共存》の上に築かれていく《尊厳と正義にもとづく平和》をいくら切望しているとしても、そうであれば尚のこと、「わたしたち」はパレスチナ人の中に閉ざされるわけにはいかない。イスラエルのユダヤ人の中にも「わたしたち」が見出されなければ、パレスチナ人の中の「わたしたち」は現実の存在として登場することができないのは自明の理であろう。《苦しみつづけてきた国民の犠牲に長いあいだ少しも近づこうとしなかった指導者の見苦しいごまかし、みっともない立場のぐらつきを振り切らなくてはならない》のはアラファトを代表者とするパレスチナのみならず、シャロンを指導者とするイスラエルのユダヤ人でもあるとすれば、「わたしたち」は双方の彼らの中にも育まれなくてはならないのである。

しかしながら、「わたしたち」はパレスチナ人やイスラエルのユダヤ人の中だけにとどまるわけにはいかない。「パレスチナ」問題は中東のパレスチナ人やイスラエルのユダヤ人だけが直面し、彼らだけがかかえこんで解決しなければならない局地的な問題ではありえないからだ。もちろんそのことは、世界各地に「パレスチナ」問題が深刻な危機として見え隠れしているというように、単に比喻として語られるだけではない。実際問題として「パレスチナ」問題はイラク侵攻を始めとする中東地域全体の問題にまで拡大されているし、その中東に世界経済を左右する石油が巨大に埋蔵されているとなれば、「パレスチナ」問題は否応なしに国際的な問題として世界の耳目を集めないわけにはいかない。逆にそのことが「パレスチナ」問題をより一層複雑にしているといえるし、イラクが世界第二位の石油埋蔵量を誇る国でなければ、イラク侵攻自体がありえないことであつた。

「パレスチナ」問題が世界に食い込んでいる問題であることを見据えるようにして、サードは、《わたしたちに必要なのは、虐げられてきた精神を高揚させ、現在のあさま

しい状況の先を見させてくれるようなヴィジョンである。ほんとうに希求すべきものとして確固たる態度で人々に示されれば、そのようなヴィジョンは決して破綻することはない」と断言する。「ふるい起たせるヴィジョン」の中で「わたしたち」は生まれ、姿を現さなければならないということだ。いや、「わたしたち」は「ふるい起たせるヴィジョン」として登場する必要があるし、そのようなありかたにおいてしか「わたしたち」はどこにも存在することができない、というふうにも響いてくる。「ふるい起たせるヴィジョン」こそ「わたしたち」にほかならない、とサイドがいうとき、彼は「パレスチナ」問題を「ふるい起たせるヴィジョン」という、パレスチナ人が切望しているだけでなく、イスラエルのユダヤ人が遠望しているだけではない、世界がいま真に驚愕みにしたいと願っているからであろう、人類にとっての普遍的な展望の中に置いたのである。

「わたしたち」が「ふるい起たせるヴィジョン」として登場し、《ほんとうに希求すべきものとして確固たる態度で人々に示されれば》、「わたしたち」もそのヴィジョンも《決して破綻することはない》というようにして、サイドが「わたしたち」について語る声を聞くが、訳者はサイドの「わたしたち」についてどう受けとめるのだろう。《それは誰をさしているのか？》という問いの前に訳者は立つ。

《答えは、さほど単純ではない。少なくとも、9月11日の事件の後に合衆国のメディアを覆うようになった愛国ムードを煽るための「われわれ」とは対極にあるものである。ブッシュ政権のテロ撲滅戦争を批判し、爆撃されたアフガニスタンの民衆に同情を表明する識者の声は合衆国の中でも聞かれなかったわけではない。合衆国の戦争に便乗してパレスチナ人への迫害を一段と強化しているイスラエルを非難する声もあがっている。だが、テロ撲滅などという恣意的なスローガンのもとに大国の身勝手の犠牲にされているアラブやイスラーム世界の民衆を、「彼ら」として擁護するのではなく、「わたしたち」と呼びかけて励ますことのできるような欧米文化人がはたして何人いただろうか。そう呼びかけながら、同じ文章の中で、テロ事件による衝撃と悲しみをニューヨーク市民として分かち合うことのできるような人物が他にいただろうか。これほど見事に両方の側に立って分析し、発言することのできる人はまれであろう。逆にいえば、どちらの側からも距離を置いているということでもあり、それを可能にさせているのは、決してどこか一つのところに帰属することがない彼自身の在り方である。そして、ここに収めた一連の記事の中で一貫して強調されているのは、所与のものとされている「われわれ」と「彼ら」という区別のあやうさ、境界を設けることによって安堵を求めようとする衝動の愚かさや弱さである。》

サイドの「わたしたち」に対する理解を深めるために、訳者の受けとめについて一瞥しておこうと思う。《アラブやイスラーム世界の民衆を、「彼ら」として擁護するのではなく、「わたしたち」と呼びかけて励ますことのできるような欧米文化人》とサイドは地続きにはありえない。《「彼ら」として擁護する》ことに一体どんな意味があるのだろう。同様に、《「わたしたち」と呼びかけ》ることがどれほどの励ましをもたらすと

いうのだろう。私の理解するサイドは《「彼ら」として擁護する》位置にもいないし、《「わたしたち」と呼びかけて励ますことのできる》場所にも立とうとはしない。サイドは自分がいま立っている場所の中に、「パレスチナ」問題がどのようにして現れる（ことができる）のか、もし現れることができなければ、自分が「パレスチナ」問題を語ることは断念しなければならないと覚悟していた筈である。しかし、もし自分の立っている場所の中で「パレスチナ」問題について語ることができるなら、語る主体は「わたし」ではなく、「わたしたち」以外にありえないと思い定めていたにちがいない。

おそらくこういうことなのだと推測される。サイドが本当に「パレスチナ」問題を我が身の如く受けとめるのであれば、それは単なる観念や想念であってはならない。あくまでも彼の立っている場所の中に「パレスチナ」問題が収められなくてはならない。自分の立っている場所から自分が抜け出すようなかたちで「パレスチナ」問題に寄り添っても、その心情的なありかたではなんの力にもならないだけでなく、自己欺瞞に陥ることもサイド自身にはよくみえている。しかしながら、彼の立っている場所の中に「パレスチナ」問題が収められるためには、「パレスチナ」問題のほうも局地的で細分化された課題から抜け出して、待ち受けているサイドのような場所にまで入り込んでくるほどの「世界の中心」を仮装していなければならない。自分の立っている場所の中に「世界の中心」を仮装して入り込んでくる「パレスチナ」問題について語ることのできる位相は、サイドからすれば、「わたし」を含んだ「わたしたち」、「ふるい起たせるヴィジョン」の中に登場する「わたしたち」でなければならなかった。

《現在、耐えがたい袋小路にはいりこんで》いる「パレスチナ」問題の真の解決を目指す可能性に育まれつつある「わたしたち」といえるように思われるが、この「わたしたち」からすれば、《同じ文章の中で、テロ事件による衝撃と悲しみをニューヨーク市民として分かち合うことのできる》ということは、当然なことなのである。ニューヨーク市民が9・11の《テロ事件による衝撃と悲しみ》を味わっている痛哭^{つうこく}の事態こそは、パレスチナ人がイスラエル軍の暴力と抑圧によって日々味わわされている惨劇であり、これまで「パレスチナ」問題について何も知らず、無関心であったニューヨーク市民が同質の悲劇を日々被っている「パレスチナ」問題（に限らず）にいくらかでも目を向けることを願っているサイドからすれば、9・11テロの残虐への憤りと、それによる無限の悲しみを可能性への転倒として引き寄せようとするのは、当然のことといえよう。

サイドのこのようなスタンスからすれば、彼が《どちらの側からも距離を置いているということでもあり、それを可能にさせているのは、けっしてどこか一つのところに帰属することがない彼自身の在り方である》という訳者の把握に対して、根本的に異を唱えておかななくてはならない。サイドが《どちらの側からも距離を置いている》という、傍観者的な位置に蹲っているということはありえない。したがって、《けっしてどこか一つのところに帰属することがない彼自身の在り方》を架空の彼方に追いやるわけにもいかない。前述したように、サイドはいつでも自分の立っている場所の中に存在

し(ようと)しているのであって、その場所の中に入り込んでくるテーマは「パレスチナ」問題であれ、9・11であれ、すべて等価であり、同一の手付きで取り扱われるような位相を擱んでいるのが感じられる。だから、《どちらの側からも距離を置いているということ》ではなく、逆にどの問題に対しても距離を詰めてしまっているといわねばならない。

「パレスチナ」問題について言及することが9・11に踏み入ることになり、更に他の問題についても語ってしまっている、という方法をサイドは手にしているのであり、「パレスチナ」問題を「パレスチナ」問題としてしか論じることができないありかたでは、「パレスチナ」問題について本当には語りえないことをサイドは知り抜いていた。「パレスチナ」問題を貧相にし、窮屈にしているのは、「パレスチナ」問題を「パレスチナ」問題としてしかみず、「パレスチナ」問題としてしか取り扱わない手つきであって、まず「パレスチナ」問題を「パレスチナ」問題から解放することによって、「パレスチナ」問題がそれから遠くにある人々にとってどのような問題として現れることになるか、というところから着手しないかぎり、「パレスチナ」問題はどこにも赴くことができないことをサイドは学んできたのだ。

サイドは1935年、イギリス委任統治下のエルサレムの裕福なキリスト教徒の家庭に生まれ、ユダヤ人がイスラエル国家を樹立した12歳の時に、一家は故郷を追放され、カイロに逃げ延びた。その後アメリカで学び、コロンビア大学で比較文学の教鞭を取り、70年代にベイルートを拠点としていたパレスチナ解放機構(PLO)のアラファト議長の国連演説を通訳したことから、パレスチナ解放闘争に関与し、イスラエル穏健派との和平対話を模索するようになった。彼のこの履歴からすれば、彼が「パレスチナ」問題に言及し、論じていくようになるのは必然に見えるが、だがそのことはまた、彼にとっての必然性の中に「パレスチナ」問題が閉じ込められることをも意味する筈だ。PLOになんの縁ももたないまま、「パレスチナ」問題に踏み入ることのない無数のサイドに語りかけることのできる拡がりを獲得しなければ、「パレスチナ」問題は縁をもった者の運動にしかすぎなくなる。

私が読むサイドは、自分の必然性として捉えた「パレスチナ」問題を自分の必然性から解放し、なんの必然性ももたない無数の人々にとっての「パレスチナ」問題とはなにか、を追求しつづけたにちがいない。サイドが語る「わたしたち」はパレスチナ人やイスラエルのユダヤ人や彼のかかわる人々を含みながら、「パレスチナ」問題がまだ出会っていない存在たち、「ふるい起たせるヴィジョン」として驚嘆みにしてくれる可能性としての存在たちを示唆していたのであり、そのような「わたしたち」によってこそ「パレスチナ」問題が「世界の中心」として真に担われ、解決が目指されていくであろうことをサイドは予見していたのだ。明治学院大学教授の四方田犬彦はサイドの追悼文(03・10・16付産経)の中で、《キリスト教徒であったにもかかわらず、イスラム教とアラブ人への偏見を解くために、努力を惜しまなかった》サイドの人と

なりと軌跡について、こう記している。

《主著である『オリエンタリズム』は、東洋と西洋は隔絶された別個のものであり、両者はけっして互いに理解できないという考えが、西洋の傲慢な論理にすぎないことを、旅行記から文学、人類学研究までの書物を渉獵^{あか}して証したてた書物である。東洋人はけっして自分の真の姿を知ることなどできない。それを教え諭すのが西洋人の役目だ。植民地主義者のみならず、マルクスのような思想家ですら、こうした偏見を当然のごとく抱いていた。

だが、こうした遅れて愚かな東洋とは、西洋が作り出した幻にすぎないというのが、サイドの主張である。なるほど西洋は民主主義や合理主義を考案したというかもしれない。だが、その本質にあるのは、他者を侵略して自分の価値観を押しつけて恥じない、帝国主義の思想である。この考えはさまざまな論議を巻き起こしたが、世界総人口のうち三人に一人がイスラム教徒になる日が近いという現在、傾聴に値すべきものをもっている。

人間は誰しも、故郷に戻れば幸福になれると思いがちなものである。故郷から追放された者は、なんとか自分が今住んでいるところを、新しい故郷に仕立てあげようと努力する。中には、世界中が自分の故郷だという考えに到達する者もいる。だが、もっとも高い認識とは、もはや世界のどこにも故郷などというものが存在していないという考えに到達することだ。こう宣言したときサイドは、「故郷は語ることなし」と喝破した坂口安吾に近いところにいたといえる。

とはいうものの現実のサイドは、十年ほど前に不治の白血病を宣告された時、危険を冒してでもイスラエル領となったエルサレムを再訪しようと決意している。息子と娘に、まだ見たことのない父祖の地を見せたいという気持ちからであった。45年ぶりに訪れたエルサレムはまったく変わっていた。同胞のパレスチナ人が二級市民として迫害と差別の対象となっているのを見るにつけ、彼の心はひどく痛んだ。とはいうものの十年一昔のアラブの論理を振りかざすPLOにも、彼は失望しないわけにはいかなかった。唯一、サイドに希望を与えたのは、武器も後ろ盾もなく、ただ路上に落ちている石を侵略者であるイスラエル兵士にむかって投げつける、幼げな子供たちだった。

大学で文学を講じる篤実な教授と、現実の政治のなかに勇敢に批判的眼差しを向ける知識人。サイドは二つの顔をもち、最後までアメリカの好戦的な態度を攻撃し続けた。同時に狂信的なナショナリズムにも、生涯にわたって敵対し続けた。辛い人生であったと思う。しかし、強靱で勇氣に満ちた人生でもあったと思う。最晩年のサイドは、先に死んだ母親にむけて長い長い手紙を書き続けていたというのが、われわれはいつか、それを目にすることができるだろうか。》

サイドが唯一、《武器も後ろ盾もなく、ただ路上に落ちている石を侵略者であるイスラエル兵にむかって投げつける、幼げな子供たち》に希望を抱くのは、世界の無関心のみならず、アラブ世界による目にみえる支援が皆無な中で、《わたしたちの多くは絶望に追い込まれており、イスラエル高官と合衆国高官のねらいどおり一種の希望のない

挫折感にはまりこんでいる。もはやどうでもいいという自暴自棄の状態に人々を貶め、彼らの生活をとことん惨めなものにして死んだほうがましだと思わせる》、まさに《シャロンが明らかに望んでいる絶望状態》(『一段の締めつけ』 - 『戦争とプロパガンダ2』所収)にパレスチナ人が包囲されている中で、本能のように路上の石をイスラエル兵士にむかって投げつける子供たちの存在こそ、紛れもなき不服従精神のあらわれにほかならなかったからだ。不服従精神が子供たちの中に宿っているかぎり、未来は細々とであれ、脈々と受け継がれていくだろう。

もちろん、子供たちの投げつける石が未来に向かうだけでなく、他方で未来を封じる自爆テロに向かうことも充分予測される。この問題に対してサイドはデイヴィッド・バーサミアンによる9・11をめぐる緊急インタビュー(『戦争とプロパガンダ』所収)の中で、こう語っている。

「たとえば、ガザのひどい惨状(イスラエルに大きな責任があります)の中で暮らす若い男が、ダイナマイトを体に縛りつけてイスラエル人の群衆に突っ込んでいったとしましょう。ぼくは一度もそういうことに容赦を与えたり賛同したりしたことはありませんが、少なくとも理解することはできます - 自分の生活や身の回りのすべてから締め出されたと感じている人間、自分の仲間たち、他のパレスチナ人や、両親や、兄弟姉妹が苦しめられ、傷つけられ、殺されたりするのを見てきた人間の、すてばちな望みなのです。彼は、何かをして反撃したいのです。これは、ほんとうにせっぱつまった人間が、不当に押しつけられた状況から自分を解放しようとして訴えた行為として理解することができるでしょう。それに賛同することはできませんが、少なくとも理解することは可能です。世界貿易センターやペンタゴンの爆撃テロを実行した人々は、これとは別のものです。明らかに、彼らはすてばちになった貧しい難民キャンプの住民ではないからです。彼らは中産階級で教育があり、英語を話し、飛行士訓練校に通い、アメリカに渡航し、フロリダに住むことができるような人たちでした。」

どんな自爆テロにも賛同はできないが、ガザに暮らす若者の自爆テロが生活の絶望感と結びついている点で理解することはできる。しかし、9・11実行犯による自爆テロは生活の絶望感とは切断されており、観念としての絶望にすぎない点で理解はできないとサイドはいつているのだ。前者の絶望感に対して隔絶している自分の場所からはどんな言葉を発することもできないけれども、後者の絶望感に対しては観念の行使の仕方としては明らかに間違っているということである。つまり、生活の絶望感とは生活を変えることによってしかそれから逃れられないので、自分の力で生活を変えられない現状に置かれているなら、自爆テロへと死に急ぐのは理解できる。だが、観念の絶望感のほうには自分自身の力でいくらかでも観念を変えることができるのではないか。未来の希望に結びつかない観念の行使そのこと事態が絶望にほかならない。

子供たちの投げつける小石が自爆テロの方向にではなく、自分たちが希望をもって生き長らえる方向に飛び続けてほしいというのが、サイドの祈りであり、願いであった。

《わたしたちは頑強に抵抗するだけにとどまらず、創造的な抵抗に向けて前進しなければならぬということである。イスラエルへの挑戦にはなってもパレスチナ人の利益増進には十分に結びつかない、くたびれた従来の手法をのりこえる必要をわたしは固く信じている》(『一段の締めつけ』) 方向へ小石が飛んでいってほしいということなのだ。更に、パレスチナの子供たちが投げる小石がイスラエルの社会にも着地してほしいという願いをサイドは語る。《西岸やガザ地区での軍務を拒否したイスラエルの予備役兵たちに呼びかけること》であり、《イスラエルの抑圧に反対するイスラエル内部の抵抗勢力を見つけ出し、彼らと協調して活動することを試みないかぎり、わたしたちはいつまでたっても出発点にたったままである》。(同上)

さて、子供たちがイスラエル兵にむかって投げつける小石に希望を託すためには、祈るだけではあまりにも不十分である。その小石が《虐げられてきた精神を高揚させ、現在のあさましい状況の先を見させてくれるような》、すなわち、「わたしたち」を「ふり起たせるヴィジョン」を活写するのを透視しなくてはならない。死の淵にあるサイドに問われているのはこのことだ。「この先を考える」ための次の提言(『この先を考える』 - 『戦争とプロパガンダ2』所収)は、そのようにして押しだされている。

《1 良かれ悪しかれ、パレスチナは単にアラブやイスラームの大義というだけのものではない。相異なり矛盾しながらも交差するさまざまな諸世界にとっても重要性をもっている。パレスチナの運動にかかわれば必然的にこれらの多様な側面への認識も強まり、それらについて絶え間なく自己啓発することになる。そのためには、わたしたちには教養深く油断のない洗練された指導部と、それを支える民主的な支持が必要だ。とりわけわたしたちには、ネルソン・マンデラが彼の闘争について倦むことなく唱えつづけたように、パレスチナがこの時代の大きな道義的主張の一つであるという自覚が必要だ。したがって、パレスチナはそのようなものとして扱わねばならない。貿易交渉や物々交換の対象などであってはならないし、出世の手段であってならない。正義を掲げてこそ、パレスチナ人は高い道徳的な位置を獲得・維持することができる。》

2 ここにはさまざまな種類の力が作用しており、そのなかでいちばんはっきり見えるのが軍隊だ。だが、イスラエルの過去54年間にわたるパレスチナ人への仕打ちを可能にさせてきたのは、イスラエルの行動を正当化し、その一方でパレスチナ側の行動の価値を貶めて抹消しようとする、慎重かつ科学的に計画されたキャンペーンの成果である。それはただ強力な軍隊を維持するというだけのことでなく、合衆国や西ヨーロッパを中心に世論をまとめ上げるという問題なのだ。ゆっくりと整然とした活動の積み重ねにより、イスラエルの立場を共鳴しやすいものに見せる一方、パレスチナ人はイスラエルの敵であり、ゆえに「われわれ」の不快で危険な敵とみなされるよう仕向けることで生み出された力である。冷戦が終結して以来、世論や表象や思考の組織化という点でヨーロッパの退潮は著しく、取るに足らぬ存在と化している。アメリカが(パレスチナ

そのものは別にして)その主戦場だ。この国においてわたしたちの政治運動を大衆レベルで系統的に組織することの重要性をわたしたちはまったく理解してこなかったが、普通のアメリカ人が「パレスチナ人」という言葉が出るたび即座に「テロリズム」を連想するなどというようなことを防ぐには、そのような努力が必要なのだ。イスラエルの占領に対する現場の抵抗運動を通じてわたしたちが獲得したものがあったとすれば、それをこの種の活動がまさに文字どおり「守って」くれるのだ。

イスラエルがわたしたちに何をしても平気なのは、わたしたちを守ってくれるような世論大系が存在しないためだ。そういうものがあれば、シャロンも戦争犯罪を犯しながら自分の行為はテロリズムに対する戦いだなどと言ってのけるようなことは憚るだろう。CNNなどが放送する映像は、はかり知れぬ浸透力と執拗な反復力をもち、アメリカの消費者や納税者の耳に「自爆攻撃」という言葉を毎時百回もたたき込む。これに対し、パレスチナ側が対抗する努力を怠ってきたのは最大の怠慢である。たとえば、ハナン・アシュラウィやライラ・シャヒード(パレスチナ自治政府フランス代表)、ガッサン・アルハティーブ(ジャーナリスト、アル・クドゥス大学の現代メディア研究所所長)、アフィーフィ・サーフィーなどのような人々をワシントンに待機させ、CNNをはじめとする各放送局に随時出演してパレスチナ側の話を聞かせ、前後関係を説明して理解を求め、悪いところばかりではなく肯定的な価値ももつ存在として、倫理面や物語的な側面を認識させることもできるはずだ。このことを、電子コミュニケーション時代における現代政治の基本的教訓の一つだと認識できるような将来の指導体制が、わたしたちには必要だ。それが理解できていないことが、今日の悲劇の一部なのだ。

3 唯一の超大国が支配する世界においては、その超大国を熟知し深い知識を獲得することなしには、政治的に機能し責任をとろうとしてもまったく無意味である。アメリカについて、その歴史、制度、潮流と奔流、政治と文化についての知識を備えること、そして何よりも完全に使いものになる言語力が不可欠なのだ。アラブ諸国にありがちなように、わたしたちのスポークスマンの話しぶりは、情けないほどたどたどしいお粗末な英語で、アメリカについて愚劣きわまりないことをしゃべり、そのお情けにすぎり、ののしったかと思えば、またすぐ助けを請うという、泣きたくなるほど情けない初步的な無能をさらけだしている。アメリカは一枚岩ではない。わたしたちの友人もいるし、これから友人になってくれそうな人々もいる。わたしたちの解放運動の一環として、合衆国におけるわたしたちのコミュニティと彼らが所属するコミュニティを開拓し、動員し、利用することは可能なのだ。それは南アフリカの人々が彼らの解放闘争において用いた戦術と同じものであり、アルジェリア人がフランスで行なったものとも同じである。計画と統制と調整。わたしたちは非暴力の政治をまったく理解していない。そのうえわたしたちは、ANC(アフリカ民族会議)が南アの白人たちに呼びかけたように、相互の尊重と一体化の政治の一環としてイスラエル人に直接呼びかけることの威力も理解し

ていない。共生が、イスラエルの排他主義と好戦的態度に対するわたしたちの回答だ。これは一方的に折れることではない。団結をつくり出すことであり、それによって排他主義や人種差別主義や原理主義を孤立させようとするものだ。

4 わたしたちが自分自身を知るためのもっとも重要な教訓は、イスラエルが現在占領地で行なっている行為の恐ろしい悲劇にはっきりと現れている。結局のところ、わたしたちは一つの民族、一つの社会なのであり、イスラエルがパレスチナ自治政府に加えた猛攻撃にもかかわらず、わたしたちの社会はいまも機能している。わたしたちが一つの民族である理由は、わたしたちにはきちんと機能している社会があり、一つの民族としてのわたしたちが経験してきたありとあらゆる嫌がらせ、歴史の残酷な回転、不運、悲劇にもかかわらず、その社会は（過去54年間続いてきたように）これからも続いていくからだ。イスラエルに対するわたしたちの最大の勝利は、シャロンや彼の同類たちにはそれを認識する能力が欠けているということだ。それゆえに彼らは、その巨大な力と非人間的な残虐性にもかかわらず、いずれは敗退する運命にあるからだ。わたしたちは自分たちの過去の悲劇と記憶を克服しているが、シャロンのようなイスラエル人たちにはそれができていない。彼が墓場にもっていくのは「アラブ殺し」の汚名だけで、政治家としては自国民に動揺と不安の増大をもたらした失敗者として記憶されることになるだろう。もちろん彼があとに残すものは一人の指導者の遺産であり、これから来る世代の足場となるものはずだ。だが、シャロンもモファズ（参謀総長）も、また彼らとともにこの死と大虐殺のサディスト的なキャンペーンを遂行している者たちは一人残らず、後に遺したのは墓石だけだったということになるだろう。否定は否定を生むだけだ。》

ここで、非常に印象的で決定的なことが語られている。《わたしたちは自分たちの過去の悲劇と記憶を克服しているが、シャロンのようなイスラエル人たちにはそれができていない。》《それゆえに彼らは、その巨大な力と非人間的な残虐性にもかかわらず、いずれは敗退する運命にある》ということだ。彼らは《自分たちの過去の悲劇と記憶を克服してい》ないがゆえに、その民族的なトラウマを「わたしたち」に対する《非人間的な残虐性》として大いに発揮しているが、《自分たちの過去の悲劇と記憶を克服している》「わたしたち」は、彼らのような轍^{てつ}を踏まない。だから、「わたしたち」は勝利し、彼らは敗退する。人類が我が身を滅ぼす愚かさから抜け出し、生き延びていく叡智を開示しつづける限り、《否定は否定を生むだけ》の彼らの自滅行為が敗退しない筈がない。サイドはそういっているのだ。そう、サイドは「パレスチナ」問題とは「イスラエル」問題ではないのか、あなたがたイスラエル人の問題ではないのか、とこの提言の中で鳴り響かせているのである。「わたしたち」が自分自身のためではなく、「イスラエル」問題のために袋小路に追い詰められ、自暴自棄になっていく必要がどこにあるだろう。サイドはそう言い残して次の世界へと旅立っていったのではなかったか。

2004年6月14日記